

[国 語]

非連続型テキストを用いた討論による表現力の向上を図る取組

飯塚 澄人*

1 はじめに

PISAショックが叫ばれて久しい。PISA調査(2003年)において、我が国の子どもたちの読解力の低下が確認されているところである。特に、「テキストの解釈」、「熟考・評価」、出題の形式における「自由記述」に課題があることが明らかになっている。この結果を受けて文部科学省では、読解力向上プログラムとして、3つの目標を提示している。

【目標1】テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実

【目標2】テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実

【目標3】様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実 (下線:飯塚)

また、2007年から行われている全国学力・学習状況調査の結果分析において、Benesse教育研究開発センターの島田研児は以下のように述べている。

次の2点が従来の国語科の指導ではあまり培われて来ず、今後求められる力として重要になるものであると判断できる。

(1) テキストの内容や形式について、自分の考えを根拠を明らかにしながら述べる力。

(2) 図や表・グラフ、地図、広告など、文章以外のテキストについて理解・評価する力。(下線:飯塚)

実際、毎年、全国学力・学習状況調査において、この力を調べる問題が出題されている。全国学力・学習状況調査における出題の傾向は、現在の子どもたちにとって伸ばしてほしい学力を、現場の教員に対して啓発する意味も含まれている。2012年4月に行われた国語Bの調査問題における以下の問題から、文部科学省が求めている学力を垣間見ることができる。

① 問題2における条件

資料の中の中学二年生の割合と中学三年生の割合を比べてちがうこと、あるいは両方に共通していることを取り上げて質問をしたいことをはっきりと書くこと。

問題3における条件

「マラソンの世界記録上位5人」「日本人選手の記録」二つの記事を結び付けながら読み、金子さんの考えの理由となる事実を、両方から取り出したり、まとめたりして書くこと。

② 問題2における問三の選択肢

- 1 立場のちがう人の発言を求め、公平な話し合いにしようとしている。
- 2 たがいの考えのちがいを比べて、一つの考えにまとめようとしている。
- 3 話し合いの目的を確かめ、それに合わせた発言を求めようとしている。
- 4 これまでに出された考えをまとめるとして整理しようとしている。

すなわち、①複数の資料(非連続テキストを含む)を見比べて自分の意見を構築すること、②話し合いの場において、目的に沿った話し合いをする中で多様な意見を集約したり昇華させたりすること、が求められていることが分かる。

こうした教育界の流れを踏まえると、授業改善を図るにあたり、資料活用を中核にすえ、読み取った資料を基に自分の考えを話し合う授業展開をする必要性が見えてくる。これを踏まえ、非連続型テキストの読解と話すこと・聞くことを関連付けた単元を構成し、子どもたちの読解力と表現力を伸ばす取組を行った。

* 上越市立里公小学校

2 研究の目的

本研究の目的は、図表やグラフなど非連続テキストを読み取る力の育成と、それらを関連付けながら自分の考えを表現する力の育成を合わせて行うことで、話し合いの力が向上するかを考察するものである。

3 実践の概要

以下は、上越市立里公小学校で2012年9月14日（金）から9月20日（木）までに6年生30人の学級で行った実践の概要である。

(1) 単元名 伝え合って考えよう

教材名 パネルディスカッションをしよう

(2) 目標

- ◎ パネルディスカッションを通して、自分の意見を適切に発表したり、友達意見を正確に聞き取ったりして、自分の意見と比べながら話し合うことができる。
- 主張したいことが明確に現れるように、事実と意見を区別して整理し、構成を考えて意見文を書くことができる。
- 非連続型テキストを読み取り、考察を加えることで自分の考えをはっきりさせることができる。

(3) 本単元指導に当たっての考え方

【教材観】

本単元は資料をもとに考えたことを話し合い、自分の意見を深めていく学習である。本教材でのテーマはごみ問題、環境問題である。4年生の時に社会科で学習してきたことから、関心も高くなじみやすいテーマである。

子どもたちは、ごみを減らさなければならないという考えを概念的にもっている一方、使い捨て社会の生活に慣れてしまっているために、自分の生活を見直すきっかけは少ない。子どもたちが本単元に触れることにより、ごみを減らすべきでも自分の生活は変えられない、というジレンマをもつ。使い捨て社会における自分のこれからの生活を考えたときに、賛否、中庸、折衷などさまざまな考えが生まれてくる。

自分の考えを裏付けるために、調査活動を行うことが不可欠である。自分の考えを確定させる段階においては、さまざまな資料を用いることが求められる。資料には、文章による資料のほか、表やグラフといった非連続型テキストもある。表やグラフ、コラムなどのもつ意味を読み取り、それらを重ね合わせて考えることで、新たな自分の考えを構築していく。これまでこうした資料の分析は、社会科や理科など他の教科で用いられてきたものであるが、それらに論理的な評価や解釈を加え、他に自分の考えが伝わるように表現していくことは、今、国語科で求められている力の一つでもある。

さらに、自分の考えを友達と交流するため、話し合いの場面を設定する。自分の考えと友達の考えとを比較することを通して、自分のものの見方、考え方を広げていくことができる。友達の意見に自分の意見を重ね合わせて論を強めたり、相手の意見の脆弱な部分を指摘することで反論したりする場面では、論理的な思考や説得力のある話し方が求められる。高学年ではこうした効果的な表現力も求められているところであり、本単元はこれらの学習する場を設定できる単元であると考えられる。

【児童の実態】 6年生30名（男子18名、女子12名）

6年生になり、1学期にはディベートという討論形式を体験している。その学習の中で、友達との意見の交流による考えを深める楽しさを実感しているところである。発言に積極的な児童とそうでない児童とが見られるが、それぞれに考えをもって話し合いに参加することができるので、司会の進行により話し合いを盛り上げることができる子どもたちである。パネルディスカッションという討論形式は今回が初めてである。

表やグラフを用いて自分の主張を述べる学習は、5年生の時に総合的な学習の時間で一度経験をしている。現在の日本の農業の問題を考えるというテーマで、食料自給率、TPP、震災による農業の影響等について、本やインターネットから資料を集めて、ポスターセッション形式で発表会を行った。自分でテーマを決めて資料を基に問題点を見出すことはできたが、今後はこうなるだろう、私はこうしていきたい、という主張を構築するに至った児童はわずかであった。

【単元の構想】

① 非連続型テキストの読み取りをすすめる

グラフや表といった非連続型テキストの読解力が求められている。本単元においては、京都市のごみ排出量のグラフ

の読み取りからごみ問題に注目させた後、ペットボトルの是非をめぐって、さまざまなグラフや表を読み取る活動を行う。その中で、事実を示す客観的なデータを元にして、データから分かることと、データを基に考えた自分の考えとを明確にした表現活動を行うことを目的とする。今回用いる資料は教師が提示したものをを用いることになるが、連続型のテキストばかりでなく、非連続型テキストの資料を用意する。これらが意見の裏づけとなり、自信をもって発表する姿につながることを期待している。グラフや表の読解や解釈は経験が少なく、抵抗を感じる児童も少なくないと思われる。読み取ったことや考えたこと、今後の自分たちの生活に向けての提言などを各自が考えられるよう、個別指導やグループでの情報交換の時間をもつなどの配慮をしたい。

② パネルディスカッションの形式を用いる

自分の考えを発信する方法として、パネルディスカッションを活用する。1学期には、ディベートという形式を用いて討論をする学習を行った。子どもたちにとって、パネルディスカッションは初めて出会う形式の話し合いである。パネルディスカッションでは、自分の意見を明確にもつ力や、様々な知識や情報をもとに自分の意見を構築していく力、相手を説得させるための情報収集や活用能力、適切な表現方法を用いて自分の論旨に説得力をもたせる力を養う。また、論理的な思考力を高めるだけでなく、相手の意図を理解し、自分の意見を再構築し、さらに意見を述べ合うなど相互作用が期待でき、相手とのコミュニケーション力を高めることができる。このように、自ら課題を見つけ、必要な情報を収集、整理する中で、自分の考えをもち、目的に応じて適切に表現したり、論理的に意見を述べたりする資質や能力は、国語科として大切な能力である。

ディベートでは、立場が賛成か反対かの二択であり、教師によって決められた立場であった。それに対して今回のパネルディスカッションでは、まず自分の立場を自己決定することができる。また、少しずつ減らしたい、現状維持など様々な立場が考えられる。前時に書いたプリントをもとにパネリストを選定し、話題提供させることで、フロアーである子どもたちは自分の考えた立場の他にも様々な立場があることに気づき、自分のこれからの生活の仕方について考えを深めることができるだろう。

自分の意見を確実にし発表しやすくするために、作戦カードや自分の考えをまとめるためのプリントを活用する。

(4) 指導計画 (全4時間)

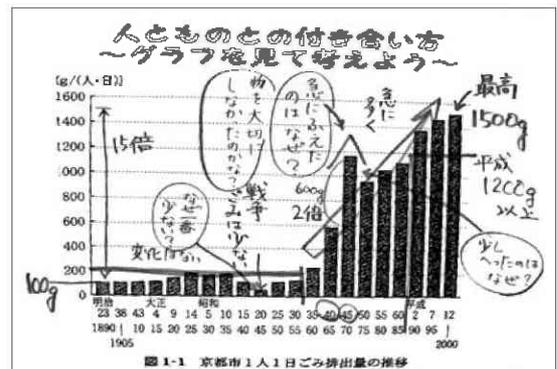
時	本時のねらい	主な学習内容
1	・ごみにかかわるグラフを正しく読み取り、自分の考えをもつことができる。	・「ごみ排出量の推移」のグラフを読み取る。 ・グラフから分かることや疑問点をまとめ、さらに調べ進めるにはどのような資料が必要かを考える。
2	・ペットボトルの使用の是非について自分なりの考えをもつことができる。	・「ペットボトルについて考えよう」を読み、ペットボトルの問題に気づく。 ・自分の生活を振り返り、理由を挙げながらペットボトルの使用の是非について考える。 ・ペットボトルに関する資料を読み取る。 ・自分の意見の裏づけになる資料を選択する。
3 (本時)	・自分の意見と友達の意見の違いを考えながら聞き、テーマについての考えを深めることができる。	・ペットボトルの使用の是非に関する討論会(パネルディスカッション)を行う。 ・友達の意見を聞いて自分の考えがどう変化したかを考えたり、友達の意見を認め合ったりする。
4	・序論→本論→結論の型を知り、意見文を書くことができる。	・例文を読み、意見文の型を知る。 ・ペットボトルの是非について自分の意見文を書く。

(5) 指導の実際

第1時

●ごみにかかわるグラフを正しく読み取り、自分の考えをもつことができる。

グラフから必要な情報を読み取る、それについて自分なりの評価を与え考察するという経験を、これまでの国語の学習では扱ってはいなかった。そこで、本時を設定した。社会科的、あるいは算数的な学習という観点ももちろんある。国語の学習としては、論理的に思考を組み立てたり説明したりし、それを言語で表現することが大切なのではないかと考える。



資料1 話し合いをまとめた

したいと思います。

話し合いの過程で出された意見（質問を除く）は、のべ29回であった。そのうち、資料を根拠として挙げたものは15回である。

- ① ペットボトルに反対。半分しかリサイクルできない。（資料4）
- ② ペットボトルとビンを半々にするとよい。ペットボトルは再生されるし、ビンは再利用される。（資料5, 3）
- ③ ペットボトルは安価で大量生産ができる利点がたくさんある。（資料1）（3名）
- ④ ペットボトルがこのまま増え続けると、環境に大変なことになる。（資料4）
- ⑤ ペットボトルもリサイクルされているから環境に悪いばかりではない。（資料5）（3名）
- ⑥ ペットボトルは回収量の半分は燃やされているので、環境に悪い。（資料7）
- ⑦ ビンをもっと使うことで、ペットボトルを減らすようにすればいい（資料2）（2名）
- ⑧ びんは何回も使えて1本当たりの費用や環境への影響が少なくなる（資料6, 11）
- ⑨ どうしても必要と考えている人が少ないから、ペットボトルは減らしてもいい。（資料9）
- ⑩ ペットボトルは再生ボトルにするにはコストがかかる。（資料10）

一方、自分の経験を根拠として挙げたものは14回であった。

- ① ペットボトルに賛成。ビンは重くて割れるし、ふたを閉められない。（5名）
- ② ペットボトルに賛成。軽いしキャップが閉められて便利。（3名）
- ③ 紙パックを増やすといい。軽いしリサイクルできる。
- ④ カンだけ、ビンだけは不便。現状維持がいい。
- ⑤ 大量にリサイクルされるようになれば、再生ボトルにするコストも下がってくると思う。
- ⑥ 大きい量の飲み物は飲みきれないから、ペットボトルでなければならぬ。少量の物はビンや缶にすればいい。（2名）
- ⑦ ペットボトルが増えると石油がどんどん使われて、環境に悪いから反対。

回数的には、半数が資料を根拠としていることがわかる。1学期に行ったディベートの学習においては、自分の経験を根拠とすることで説得力が増すという学習をしてきた。資料を根拠としないで意見を述べている児童には、実際に落ととして割ったことがあるとか、飲みきれなくて最後は捨ててしまったという経験をもとにして述べている児童が少なくなかった。これも学習が活かされている側面ととらえることもできる。

根拠として挙げた資料が多岐にわたっているのも、期待通りの結果だったといえる。資料自体は、賛成派にも反対派にも、それぞれ有利なものやとらえ方によってどちらにも使えるものなどをこちらで選んだわけだが、テキストによる資料は1と5だけで、あとはグラフや図を使ったものである。それぞれの意味を解釈して自分の論を強めるためにつかえていることに成果を見て取れる。

4 おわりに ～ 成果と課題

○ 非連続型テキストから自分の考えを構築する

非連続型テキストの読取を、数値の読取やその変化だけにとどまらず、それらから疑問点を見出し、さらにそこから何がいえるのか、調べ進めるためにはどのような資料が必要か、といった資料の見方を学ぶことができた。

また、多くの資料の中から自分に必要な資料を見つけ出し、関連付けたりしながら自分の考えの根拠として用いることができるようになった。

○ 話し合いを通して高まる

本実践では、友達と意見を交換し合い、話し合いにより考えを高めあうことで、自分に自信をもちさらに学び続けようとする意欲をもつ姿を求めてきた。そのためには、自分の考えをもつこと、意見を述べる方法を知っていること、友達と認め合う雰囲気醸成が不可欠である。それぞれの場面において、本実践のような取組を、年間を通じて行うことが求められる。こうした取組を根気強く行っていくことが今後の課題の一つといえる。

○ 反論想定をして話し合う

本実践では、子どもたちに反論想定をすることで有利に話し合いを進めることができることを、あらかじめ伝えておいた。しかし、自分の弱点を見つける、あるいはそれへの対応策を考えて話し合いに臨めた児童はわずかであった。より説得力のある話し合いをするための技術として身につけさせていきたいものの1つである。

〈参考文献〉 高月 紘 ごみ問題とライフスタイル 日本評論社 2004

武田邦彦 リサイクルしてはいけない 青春出版社 2000